

『ジークル博士とハイド氏』解釈 (三)

竹 森 修

前のところで、捕えられたハイド氏を取り囲んで「怪鳥ハーピーみたいに猛り狂う女たち」が登場しましたが、少し補足しておきますと、このハーピーは人間でも物でも何でも攫っていく癖があるそうで、何であれ行方不明になったら、このハーピーのせいにしてもよさそうです。人間存在として、みずから素性自明として疑われない健全なる私ジークルが、実は無素性であり、或は、素性不明であるのもこの怪鳥ハーピーのせいのように、しかも、健全なる私ジークル自身がこの素性を攫い隠した当の怪鳥ハーピーのようなのです。この怪鳥ハーピーは「隠す」のが得意だけではなく、「隠れる」のも得意で、「隠す」がそのまま「隠れる」になっており、怪鳥ハーピー自身が身を隠して健全なる私ジークルとして隠れているようです。しかも、この怪鳥ハーピーは貪婪な不毛の鬼婆の面相のようでもあり、麗しの乙女の面相のようでもあるという、或は、麗しの鬼婆乙女とも言わべき、まことに奇怪な怪鳥ハーピーであり、隠れたハイドであって、今後の展開の一切の鍵を握っている謎なのです。

「そうですね」とエンフィールドは言った。「それを言っても別に差し障りはないと思います。その男の名はハイドでした」。

さて、ここではじめて「ハイド」という犯人の名前が自己満足的無知を代表するエンフィールド氏の口から明らかにされるということはおもしろいことです。というのは、主体的には、ハイドは自己満足的無知の隠れたる実体であり、しかも、隠れるとして成り立っているハイドであり、且つ、その自我自体の自己矛盾性、自己破壊性としてあるからで、主体的には、エンフィールドは隠れたるハイド（つまり、隠れたる「私は殺す」としての私ジークル・エンフィールド）であり、従って、隠れたるハイドがみずからも隠れて名乗っているわけです。しかし、ハイドの事件に捲き込まれるのを恐れて自己満足的無知の死の安定を選ぶエンフィールド自身にとって、隠れたるハイドはどこまでも隠れたままであり、その意味において、エンフィールドにとっては、彼がハイドの名前を言っても「別に差し障りはない」のです。他方、アタスン氏は、勿論職業的関心からと、それに関連して、後で触れるような、親友ジークルに関する或る懸念からですが、「ハイド」の名前からさらにハイドの人相を聞き質してその正体を知ろうとします。

「見た感じはどんな男かね。」

「彼の人相を説明するのは容易じゃありません。彼の外観にはどこか変なところがあるんです。なにか不快な、嫌でたまらなくなるようなところがあるんですよ。私があんな嫌悪を覚えた男を今まで見たことがありませんが、それでいて何故そんなに嫌ったのか自分でも殆ど分らないんです。彼はどこか畸形にちがいはありません。彼は畸形であるという感じを強く与えるのです。尤も具体的にどこが畸形なのか私には分りませんがね。彼は異常な容貌の男なのですが、それでいてどこが異常なのか実際具体的に言えないんです。ほんとうに、私には説明がつかないんです。それは記憶が無いからではありません。だって、たった今でも彼の顔を思い浮べることができると断言できるんですから。」

かくして、アタスンの心にもハイド氏が聴覚を通して名前として浮ぶだけではなく、また聴覚を通して視覚的

にひとつの顔として浮んでくることになります。しかし、その顔はとにかく不快感、嫌悪感と畸形的感じを与えながらも、なんとも説明しがたい顔であり、その意味で、輪郭はあれども目鼻立ちの無い顔です。ところで、エンフィールド氏が「私があんなに嫌悪を覚えた男を今まで見たことがありません」と言うとき、彼はその嫌悪感において自己中心的他者否定的虚妄の自我なるおのれの実体を、知らずして、隠れて、露呈しているわけです。なぜなら、その嫌悪感はこの本然的な日常的自我からくるものであり、その自我の個別的表現であって、その自我の隠れたる、実体を隠れて、指し示しているからです。彼はハイド氏を見ることにおいて、同時に彼自身の隠れたる、実体たる人倫的死のハイドを、無自覚ながら、つまり、依然隠れたるままながら、そこに見たのであり、この「受動的虚無」の深淵の水鏡の死の顔ハイドを見たエンフィールドは、それを見る眼を見るその醜悪な眼を見て不快と嫌悪を感じたのです。しかし、ハイド氏を単純に他人として見ることによって、同時にまた、そのハイド氏として表れている外にして内なるハイドを無自覚的、对象的に見ているエンフィールドは、その醜悪な眼が自分自身の眼であること、それがおのれ自身の隠れた実体であることに気付かず、つまり、自分がこの殺人鬼ハイドを実体とする「私は殺す」としての偽善的私ジークルであることに気付かず、ハイドとしての自分が隠れており（ハイド）、或は、醜悪な眼差しハイドが自分がお前の隠れた実体なのだと告げ知らせているにも拘らず、それに気付かず、逆にエンフィールド（偽善的私ジークルとしての）は自分を脅かすものとしてこれを对象的に捉え、不快と嫌悪をもってこの外にして内なるハイドを却けようとするのです。（ハイドを却ける自分自身が、ハイドを却けるがゆえに、隠すとして、或は隠れるとしてハイド。）エンフィールドが「彼はどこか畸形にちがいありません」と言うときも、その「畸形」がそのまま、それと対立するエンフィールドの「正常」なるもの似而非的性格、隠れたる、「畸形」の実体を曝露しようと脅かすとき「畸形」となっていることに注目しなければ

ばなりません。だからこそ、自己満足的無知の安定を好むエンフィールドは不快と嫌悪を覚えるのです。勿論、この不快と嫌悪には本来的批判の要素も隠れて含まれてはおりませんが、それが両刃の剣として自覚的に深くおのれ自身に切り込まれないかぎり、まさしく隠れたまままでとどまることになります。このハイド氏の醜悪な顔が見えながら見えない、記憶に強く焼きつけられながら名状しがたい醜悪な顔であるのは、エンフィールドがそれを他人の顔として単純に对象的に捉えているがゆえであり、他人の顔としてしか自分の問題になっておらず、従って、そこにそれとして表れている自分の醜悪な顔が暗号的にしか問題になっていないがゆえであり、エンフィールドがそれをおのれ自身の隠れたる素顔として主体的に捉えてゆく過程において、はじめてそれはその眼鼻立ちを明確にし名状しうるものになるはずです。それはエンフィールドからハイドの人相について訳の分らぬ説明を聞いたアタスンにおいても同様です。

ところで、実は、アタスン弁護士は彼の顧客のひとりであるジークル博士から保管を依頼された遺言書です。ハイド氏の名前を知っていたのであり、今、エンフィールドからハイドの名前を聞いて、それと同一人物であることに気付き、従って、例の小切手の振出人がジークル博士であることに気付いていたのです。ハイドが慰藉料の支払いのために例の「不気味な」家の地下室の戸口から入ってゆくとき、鍵を使ったかというアタスンの問いに対して、エンフィールドは「あいつは鍵を持っておりました。そればかりではありません。彼は今もそれを持っています。私は彼がそれを使うのを見たんです。まだ一週間も経っていないんですよ」と答えます。あとで分るように、このハイド氏の「不気味な」住居とジークル博士の家とは、外からは分りませんが、実は内部が続きになっているのです。しかも、それは建物の構造だけの問題ではありません。ハイド氏は、外からは分りませんが、主体的に、ジークル博士と実は内部続きになっているのであり、しかも殺人鬼ハイドが隠れたる「私は殺

「す」として隠れたる、ジーキルであり、ジーキルが隠れたる、「私は殺す」として隠れたる殺人鬼ハイドであるという意味において内部続きになっているのです。そして、ハイド氏が持っているこの鍵はそのままハイド氏とジーキル博士との関係の謎を解く鍵であり、従って、ジーキルの隠れた素性（他者を「私は殺す」として立つことにおいて、同時に私を「私は殺す」ことにより人倫的死としてある殺人鬼ハイド、つまり、隠れたる、「私は殺す」としての偽善的私ジーキル）を解く鍵にそのままなっているわけです。

しかも、隠れたるハイドとしての自己が覚知されず隠れていることによって、かえってハイドであり、いや、隠れていることが、とりもなおさず、ハイドなのであり、隠れたるハイドとしての自己が覚知されるというかたちで曝されることが大悲の光に曝され、ハイドがハイドのままでハイドでなくなる、つまり、隠れたる、として成り立つハイドが、隠れるが成り立たなくなることに於いてハイドでなくなるのであり、自閉的自我牢獄としての隠れたるハイドが、その覚知において、開かれた大悲の世界に包摂されるのです。まことにハイドはハイドなる自我牢獄を開ける鍵であり、ハイドがまさしく鍵を握っているのです。尤も、隠れたるハイドは隠れる、ことにおいてハイドなのであるゆえに、隠れたるハイドは隠れたるハイドなる自閉的自我牢獄を開く鍵をもたず、鍵を握るハイドとは隠れたるハイドなる、或は隠れる、としてのハイドなる人間存在のその原罪の内に入り、この隠れたるハイドとして隠れ、このハイドとして、無知の隠れる、としての自我に絶えず呼びかけ、ハイドの覚知というかたちで呼び返そうとしながら（というのには、そのハイドこそ未だ救われずしてすでに救われてあるハイドなのだから、）聞く眼をもたぬ自我ゆえに空しく隠れているあの大悲の死神ハイドこそ真実に一切の鍵を握るハイドでなければなりません。そういう意味で、まさしくハイド氏が鍵を握っているものであり、ジーキル博士だけではな、エンフィールドにおいても、アタスンにおいても、読者自身においても、人間存在の鍵を握っているのはこ

のハイドなのです。ハイドはスフィンクスの謎であり、同時にその謎を解く鍵でもあります。ハイドに関心を示すアタスン弁護士はその関心の次元を深めながら、ハイドとのつき合いを続けるために舞台に残る定めであり、「自分のおしゃべりが恥かしい。もう二度とこの事には触れないとお互い約束しましょう」と言ってハイドのことを忘れ去ろうとする、自己満足的無知の死の安定を好むエンフィールドは、以後一度だけ、散歩の相手としてしか『ジークル博士とハイド氏』の舞台には登場しない定めにあります。

「ハイド氏の探索」

普段の日曜なら、アタスン弁護士は夕食が終ると暖炉の直ぐそばに腰を下して、文机の上になにか無味乾燥な神学書をひろげ、近くの教会の大時計が十二時を告げると、厳肅な、感謝に満ちた心で就寝するのが習慣でしたが、その日は、夕方、独身のわが家に帰って来た彼は心暗く、夕食のテーブルに着いたものの、食欲も無く、食卓が片付けられると、直ぐ執務室へ入っていきました。そして、金庫を開けて一番奥から「ジークル博士遺言状」と封筒に裏書きされた書類を取り出し、眉をくもらせながら内容を読みはじめました。その遺言状は博士の自筆になるものでした。というのは、アタスン弁護士はそれが作成された以上預からざるをえませんでした、その作成に少しの手助けをするのも断ったからでした。

その遺言状には、医学博士、民法学博士、法学博士、王立協会会員、等々たるヘンリー・ジークル死亡の場合は、彼の全財産は「彼の友人にして恩人たるエドワード・ハイド」の手に渡るべきことと規定されてあるだけでなく、ジークル博士が三ヶ月以上にわたる期間失踪若くは理由不明の不在をなしたる場合には、前記エドワード・ハイドは、博士の家人らに少額の支払をする以外は何らの負担も責務も負うことなく、即時前記ヘンリー・ジークルの後を継ぐものとする規定されてい

た。

ハイド氏の姿無き存在はすでにアタスン弁護士の上に暗い影を落し、日曜の習慣をかき乱して、あたかも一滴の水の落ちるごとく、その「堅い大地」の幻想に波紋を投じて、「堅い大地」が幻想であり、実は「受動的虚無」の深淵であったことを露わにします。机の上に開かれた「無味乾燥な神学書」は必ずしもアタスンの信仰の形骸化、情性化を物語るものとは言えず、むしろ、就寝の際の「厳肅な、感謝に満ちた心」は信仰における彼の或る種の誠実さを物語っていると云えますが、それにも拘らず、かかる彼の日常性すらも問われるべき自己満足的無知のたかみなる、隠れたる虚妄の自我のそれであり、今、ハイド氏の存在はそのまま彼の心に暗い影を落すことによって、その自我を問い、その信仰の信憑性を問う内なるハイドとなつてゐるのです。

この遺言状に記載されたハイド氏という人物はアタスンにとつてはじめて聞く名前前で、かく自分が見ず知らずの、しかも博士とどういふ関係にあるのかも分らぬ人物に、ジーキル博士が彼の全財産を遺贈すると規定する遺言状の作成を頼まれたアタスン弁護士はその非常識さに腹を立て、その依頼を断つたのですが、エンフィールドからハイド氏の事件と、ジーキル博士の署名入りの小切手の事を聞いた今、ハイド氏とジーキル博士との関係が次第に視覚化して彼に迫つてくるのです。それは強請る者と強請られる者との関係です。

この書類は久しく弁護士が目障りであつた。彼は弁護士としても、また、突飛さを不謹慎と見做し、人生の健全且つ習慣的側面を愛好する人間としてもそれに立腹したのであつた。そして、これまではハイド氏について彼が知識を欠いていることが彼の憤りをつのらせたのであつたが、いまや、一転して、ハイド氏について彼が知識を得たことが彼の憤りをつのらせたこととなつた。その名前が彼にはそれ以上のことを知る事ができないただの名前にすぎなかつたとき、それだけでもすでに結構不快なものであつたが、その名前が様々の忌むらしい属性に包まれはじめたときには、さらに一層不快なものとなつ

た。そして、これまでかくも長い間彼の眼を妨げてきた流動する、幻影のごとき霧の中から突然輪郭明らかに悪魔の姿が跳び出した。

「この書類は久しく弁護士を目障りであった」とは、勿論ハイド氏のゆえであり、この書類はまさにその書類として隠れて表れたハイド氏として「目障り」なのであり、ジークル博士のハイド氏への遺産譲渡の規定が弁護士としてだけではなく、「突飛さを不謹慎と見做し、人生の健全且つ習慣的側面を愛好する人間として」のアタスンのその良識、常識を逆撫でするものであったからです。しかし、逆撫でされたアタスンの眼に、今迄無縁の存在であったハイド氏が否応無しにとび込んできて、いまや不快極まる存在として腰を据えてしまったのです。

ところで、アタスン弁護士の中のとび込んだ「目障り」のハイド氏は、アタスンの不快感において、そのまま彼の外にして内なるハイドとなっており、アタスンの内的視覚にいまや現れたハイドは、アタスンが見る眼を見る醜悪なる眼差しであり、アタスンはその醜悪なる眼差しを見て、文字通り「目障り」(the lawyer's eyegore)として対象的に不快を感じているのです。アタスンが見る眼を見るその醜悪なハイドの眼差しは「受動的虚無」の深淵の水鏡に映るアタスン自身の醜悪なる眼差し、「私は殺す」としての私なるアタスンの隠れたる実体ハイドになっていのです。このハイドはアタスンの「目障り」となることによってアタスンの自己満足的無知を脅かして、「人生の健全且つ習慣的側面を愛好する人間」であるアタスンが、それにも拘らず、醜悪なるハイドであること、つまり、アタスンが隠れたる「私は殺す」なる偽善の私であることの覚知を迫り、「突飛さを不謹慎と見做す」アタスンが、にも拘らず、そのまま自己満足的無知の安定、偽善的な人倫的死の安定を保持しようとするフロックコートを着たブルーフロック的「慎重居士」の案山子紳士でもあることの覚知を迫っているのです。日常、客体世界を対象的に眺めることにおいて、同時にそこにそれとして隠れて表れている醜悪な

るハイドとしての虚妄の自我を眺めているにも拘らず、それに気付いていない（隠れている、それゆえにこそ隠れた、ハイドとしての、隠れたるとしての）アタソンは、ハイド氏の出現（隠れたる）によって漸く（ハイド氏の姿を通して暗号的に）おのれ自身を問題化せしめられ、ハイド氏を追及することによって、いまや、ハイド氏によって、或は、ハイド氏に具現されたスフィンクスの運命的謎によって避けがたく追及される破目になったのです。ジーキル博士の遺言状の字句の中だけに限定された、いわば、幻のハイド氏が、エンフィールド氏の説明によって、「様々な忌わしい属性に包まれはじめ」、遺言状を通じてのハイド氏とジーキル博士との関係が、こうして脅迫者と被脅迫者との関係としてアタソンの疑惑の眼に浮ぶとき、これまでもすでに「目障り」であった遺言状それ自体が、親友ジーキル博士を強請るハイドの顔を帯び、いまやのっぴきならぬ「目障り」として迫ってくるのですが、「これまでかくも長い間彼の眼を妨げてきた流動する、幻影のごとき霧の中から突然輪郭明らかに悪魔の姿」として「跳び出したとき」、主体的にも、アタソンの外にして内なるハイドが（依然無自覚的、隠れてながら）「これまでかくも長い間彼の眼を妨げてきた流動する、幻影のごとき霧の中から突然輪郭明らかに悪魔の姿」として「跳び出した」のです。この「幻影のごとき霧」はまさしく無明の霧であり、隠れたる、「受動的虚無」の深淵であり、それは自己満足的無知を表しながら、同時に、自己満足的無知としての、虚妄の自我なるアタソン自身です。その意味でこの自我はまさしく「幻影のごとき霧」insubstantial mistsであって、虚妄であるゆえに「幻影のごとき」「実体無き」「非在の」存在であり、それゆえにまた、人倫的輪郭無き無明の霧なのです。無明の霧の無明の霧たる所以は、かく「非在の」存在として立ちながら、非在たるおのれを知らぬこの自己満足的無知にあります。しかしながらこの「幻影のごとき霧」は「流動する」霧であり、風によって、生命の風によって流動するゆえに、晴れ上る可能性をつねに孕む霧です。自己満足的無知の霧は人倫的に無変化の、

無時間的死の安定を意味しますが、それが必然的に「流動する」霧であるということは、無時間的を装いながらも必然的に時間的たらざるをえない人間存在の自己破壊性を表しています。というのは、人間存在とは必然的に時間的存在であるからです。つまり、一方では自己満足的無知として立ちながら、他方では、それに不満な無知の愛知者として立たざるをえないのです。「流動する、幻影のごとき霧の中から輪郭明らかに悪魔が跳び出した」ということは、無明の霧が無明の霧であることの隠れたる、自覚を物語っています。この悪魔ハイドは、いわば、無明の霧の化身であり、「実体無き」、人倫的輪郭無き無明の霧としての虚妄の自我がかかるものとして、暗号的ながら意識(虚妄の自我自身)に明確化したという意味で、悪魔ハイドは無明の霧の実体化、輪郭化なのです。ところで虚妄の自我の虚妄性の本来的覚知を表すような無明の霧の実体化、輪郭化は、「実体無き」「輪郭無き」無明の霧の実体化、輪郭化であるゆえに、依然「実体無き」「輪郭無き」「幻影のごとき」「非在」の存在として立ちながら、かかる自我の虚妄性の覚知において、覚知として、つまり、無明の霧の実体化、輪郭化(悪魔ハイド)において、逆説的にも、人倫的実体と輪郭を有する存在として立たされることになるのです。無明の霧の脱底的覚知が晴れ上った無明の霧なのです。従って、「流動する、幻影のごとき霧の中から輪郭明らかに跳び出した」悪魔ハイドとは、この虚妄の自我の無実体性、無輪郭性の覚知、或は覚知された無実体性、無輪郭性でなければなりません。「輪郭明らか」とはこの覚知を意味するものでなければなりません。しかしながら、アタスン氏にあっては、この主体的ハイドは無自覚的且つ対象的にしか表れず、つまり、外なるハイド氏としてしか表れず、「輪郭明らか」とはそういう自己満足的な無知の知を意味するのみです。ハイドが対象的に「輪郭明らか」になればなるほど、それだけハイドの人倫的無実体性、無輪郭性がぼやけてくる(つまり、隠れる、或は、隠れることによってハイドが隠れる、或は、隠れるがハイド)わけで、単純に対象的に見えるということは、かえって

何も見えないということ、依然無明の霧の只中にあるということ、無明の霧としてあるということです。ハイド氏におけるハイドの存在証明がとりもなおさず逆にハイド氏におけるハイドの隠れたる不在証明になっており、この隠れたる不在証明がそのままアタスン自身におけるハイドの隠れたる存在証明になっているわけです。従って、「流動する、幻影のごとき霧の中から輪郭明らかに悪魔が跳び出した」と言うとき、アタスンにおいては、一種の知を意味する悪魔は自己満足的無知の霧と依然相互還元しうる無知の知であり、悪魔が中から跳び出しても、状況は相も変わらず自己満足的無知の霧であり、その中に依然真実の悪魔ハイドが隠れひそみ、「流動する、幻影のごとき霧」がそれを観ることから彼の眼を妨げているのです。尤も、ハイドが対象的に「輪郭明らか」になるということは、他方では、当のアタスン氏自身の推移にみられるごとく、その衝迫の激しさからして主体的に「輪郭明らか」（覚知）になる方向へと一転する可能性をも孕んでいます。

さて、アタスン弁護士は金庫の中にその不快な書類を戻しながら、「これまでわしはそれを狂気の沙汰と思っていたが、今それが面目失墜の問題じゃないかと思えてきた」と呟くのです。彼にとつて、この遺言状の作成は世間的常識を破る行為として「狂気の沙汰」だったのですが、彼はいま、ジークル博士が若い時の過ちを種にハイド氏に強請られてこのような遺言状を作成したのだと思ひ込み、「面目失墜の問題」と言ったわけです。その思惑は、実は、見当ちがいなのですが、しかしそれは彼の見当が外れたところにおいて当てはまっているのです。

元々、「面目失墜」は「世間に合はず顔がない」ということであるゆえに、その面目とは他者意識・自己意識の仮面の顔であり、「面目を失う」ことよつてかえつてその面目が最初から、失われるような仮面としての面目であったことを露呈せしめられるのです。この仮面的面目が失われるとき、その仮面的面目として成り立つ自己が「受動的虚無」の素面の自己隠蔽としてある自己であること、或は「受動的虚無」の素面の自己隠蔽として

の自己が他ならぬ「受動的虚無」であることを露呈せしめられているのです。ところで、かかる他者意識・自己意識としての仮面的面目は、それが失墜すると否とに拘らず、最初から失墜している面目、本来の面目の失墜状態としての虚構の面目なのです。言いかえれば、それは本来の面目の失墜の自己隠蔽としての虚構の面目であり、或はこの自己隠蔽が本来の面目の失墜状態に他なりません。かかる本来の「面目失墜」disgraceはその英語の字義通り「恩寵失墜」なのです。私はいま、人間存在としての本来の面目の失墜状態の自己隠蔽がとりもなおさず本来の面目の失墜状態であると申しました。というのは、人間存在の絶対的過去性（原罪）としてあるこの本来の「面目失墜」、「恩寵失墜」disgraceは、同じ絶対的過去性として現に「恩寵」graceの具現するところとなっているからであり、「恩寵失墜」の覚知こそ「恩寵」における本来の面目の回復に他ならないのです。従って、本来の面目とは失われた本来の面目ということ、本来の面目の失墜が本来の面目ということであり、この本来の面目に帰ることが、真実、本来の面目に帰ることなのです。かかる含蓄を有する「恩寵失墜」がハイドであるとすれば、「恩寵失墜」としてのハイドが即ち「恩寵」としてのおおいなるハイドに隠れてすでになつていて、これまた同じく絶対的過去性として、かかるおのれに無知である健全なる私ジークルに絶えず呼びかけ、呼び返そうとしているのです。

言いかえれば、健全なる私ジークルが、皮肉にも、本来の「面目失墜」、「恩寵失墜」としてのハイドなのです。なぜなら、その健全なるが自己満足的無知の「所有のたかみ」、自己中心的他者否定的「所有のたかみ」、つまり殺人鬼ハイド的たかみに他ならぬからです。隠れている（ハイド）ことが本来の「面目失墜」、「恩寵失墜」のハイドとしての虚妄の自我なのです。実際、健全なるとは隠れているということであり、ハイドは英語の文字通り「隠す」「隠れる」として成り立つハイド、「ハイドが隠れる」として成り立つハイド、隠れたる「私は殺す」

(隠れたる殺人鬼ハイド)なる私ジークルとして成り立つハイドなのです。従って、健全なる私ジークルの殺人鬼ハイドへの変身は、変身ということゆえにハイドとしてのおのれの素性についてのジークルの無知を物語り(だから健全なるただのジークルである)、私においてハイドとしての素性が隠れております。また、変身によって殺人鬼ハイドとして立った私は、かかる私をもって善しとしているゆえに自己満足的無知の「所有のたかみ」にあり、殺人鬼ハイドとして立ちながら、覚知の欠如ゆえに、依然隠れたる殺人鬼ハイドであり、或は、健全なるジークルとしての私(隠れたる「私は殺す」としての、隠れたる殺人鬼ハイドとしての私)の自己強化、自己隠蔽の強化なのであり、この隠れる(ハイド)ということこそ本来の「面目失墜」、「恩寵失墜」の私ハイドを明証するものです。殺人鬼ハイドとして立つことは、皮肉にも、ハイドが一層隠れるということであり、一層隠れるとして殺人鬼ハイドは露骨なハイド、露骨な健全なるジークルなのです。

かくして、ジークル博士の「面目失墜の問題」は、アタスンの推定とはちがって、若い頃の過ちを種にハイド氏に強請られての、他者意識・自己意識の「面目失墜」の問題ではなく、人間存在としての本来の「面目失墜」の問題であり、しかも、本来の「面目失墜」(「恩寵失墜」という絶対的過去の過ち(すでに「恩寵」の隠れたる具現となっている)を隠蔽する(ハイド)ことによって成り立っている私ジークル(隠れたる「私は殺す」、隠れたる殺人鬼ハイドとしての私ジークル)が、この隠蔽(ハイド)された絶対的過去の過ちを種に、隠れたる私殺人鬼ハイド(隠れたる「私は殺す」としての私健全なるジークル)によって強請られて、現に本来の面目を失墜し、「恩寵」を失墜しているという問題なのです。隠す、隠れるとは隠す、隠れる(ハイド)としての私自身であるゆえに、私が私に執られることによって本来の面目を失墜し、「恩寵」を失墜しているのです。ハイド氏の数々の破廉恥行為(disgraces)はジークル博士のこの隠れたる本来の「面目失墜」「恩寵失墜」(disgrace)に

起因し、その個別的具現であり、また、隠れたる「恩寵失墜」に隠れて、具現している「恩寵」を汚し、disgrace 蔽い隠す（ハイド）破廉恥行為 *disgraces* なのです。

さて、アタスン氏はジークル博士の親友の医者ラニョン博士がなにか事情を知っているかもしれないと思って、彼の家を訪ねるのでした。通された食堂でラニョン博士は独り坐って葡萄酒を飲んでいました。アタスン氏とラニョン博士とは幼い時からの馴染みで、「二人とも心底から自己を尊び、また、心底からお互いを尊ぶ人たちであり（*both thorough respecters of themselves and of each other*）、それにまた（普通なら、必ずしもそれに伴うことでもないのだが）お互いの交際を心底から楽しむ間柄でもあった」のです。互いに自尊心の持主であり、しかもお互い尊敬し合うということが紳士の紳士たるところであり、しかもお互いの交際を心底から楽しむというのですから、そういう態度は決してうわべだけの、いわば、仮面ではないようです。しかしながら、それにも拘らず、両者とも問われるべき仮面として立っていると云わざるをえないのです。問題はどうかやら「二人とも心底から自己を尊び、また、心底からお互いを尊ぶ人たちであり」のその「また」にあるようです。自尊心とは自己を尊ぶことですが、その尊ばれる自己が本来的自己ならばよいのですが、それが虚妄の自己であるならば、とんだ自尊心になってしまいます。事実、「自尊心を傷けられた」と言うときのその自尊心は、いかに無理からずとも、虚妄の自我の自尊心たらざるをえません。本来的自己の自尊心ならば、「心底から自己を尊び、また、心底からお互いを尊ぶ」のその自他を別けへだてる「また」が無く、自己を尊ぶということは客体的存在を尊ぶことを離れて他になく、客体的存在を尊ぶことが本来的自己を尊ぶことでなければなりません。ところが、人間存在は虚妄分別としての自己たることをいかにしても免れえず、たとえ「心底から自己を尊び」、「また」、「心底からお互いを尊ぶ」というふうには、両者が両立しているかに見えようとも、自他を分け別つ虚妄分別としての自我自

体がすでに自己中心的他者否定的、つまり、ハイド的自我なのであって、それゆえ、人間存在ははじめから、それゆえに隠れたる、虚妄の自我の自尊心として立っているわけです。そういう自己を尊ぶのですから、それは自己中心的自尊心たらざるをえず、また、その自己にもとづいて他者を尊ぶのですから、その他者尊重は自己中心的な他者尊重、つまり、自分好みの依怙蟲戻たらざるをえず、条件次第の他者尊重であって、うまくいっている間はよいのですが、一旦うまくいなくなると他者否定に變貌し、それによってそれが最初から自己中心的他者否定的な他者尊重であったというその仮面性を依然隠れたままで露呈します。実際、先に引用した「二人とも心底から自己を尊び、また、心底からお互いを尊ぶ人たち」の原文 *both thorough respecters of themselves and of each other* がいまひとつの意味を隠れて含んでいることに注目しなければなりません。英語の聖書（使徒行伝）十章三四節に「*God is no respecter of person*」神はかたよることをせず」とありますが、それから出てきた成句 *a respecter of persons* は「人を差別待遇する人」、「依怙蟲戻する人」という意味で、従って、*respecters of themselves and of each other* は「自分を依怙蟲戻し、また、お互いを依怙蟲戻する人たち」という意味にとれ、前者はまさしく自己中心的自尊心の持主となり、後者もまた、それにもとづいた他者尊重、つまり、自己中心的虚妄の自我の投影としての自己尊重的他者尊重であり、皮肉にも、かかる独我論的意味において「また」が消え、差別的無差別となっているのです。かかる自尊心の上に成り立つ虚妄の他者尊重は、その自尊心が傷つけられるとひっくり返って、その他者否定的実体を露わにするのは当然の理です。そこに、アタスン氏もラニョン博士もまた隠れたる殺人鬼ハイドとして立っているという現実、従って、隠れたる「私は殺す」としての私として立っているという現実が隠れているわけです。それはかかる典型的紳士に対してまことに酷な見方ではあります。しかし、それはいかなる人であれ問われるべき虚妄の自我として立っているということであり、

つまり、思いがけなくも、自分自身がだれよりも問われなければならないということなのです。

ところで、アタスンが話を聞いてみると、ラニョン博士はジークル博士に愛想をつかしたということなのです。「君たちは共通の利害というきづなで結ばれていたと思っていたんだが」とアタスンが言うと、博士は、「十年以上も前からヘンリー・ジークルがあんまり変り者になってしまつて僕にはがまんできなくなつてしまつたんだ。あいつはあたまが変になりだしたんだ」と言い、「あんな非科学的なたわ言を言われちゃ、デイモンとピシアスだって仲違いしただろう」と、興奮の余り顔を紫色にして言うのです。デイモンとピシアスはローマ伝説に出てくる無二の親友ですが、このデイモンとピシアスだって、人間である以上、仲違いするのです。というのは彼らもまた同じ人間存在として自己中心的たるを免れず、隠れたる「私は殺す」、隠れたる殺人鬼ハイドなる私ジークルとしてみずから問われているからです。

ところで、この「非科学的なたわ言」とはどうもジークル博士の変身薬の研究と関係があるようで、ジークルとの議論で、科学者として「共通の利害のきづなに結ばれていた」彼が、科学者としての自尊心を傷付けられ、昔のよしみで彼への関心は捨てないが、最近殆どジークルとは会っていないと言うのです。それは無理からぬ態度でしょうが、しかしそれにも拘らず、これでは科学的批判が人身攻撃に転化したことになり、まことに非科学的なこと、ここでもまた、隠れたるハイドとしての、つまり、隠れたる「私は殺す」としての偽善的自己が露呈されているわけです。さらに、アタスンが「君はこれまで彼の——ハイドとかいう被保護者にひよつとして出会ったことがあるかね」と尋ねると、ラニョンは「いや、そんな男のことは全然聞いたことがない。まだ一度もね」と申します。ここで「まだ一度もね」と仮に訳した部分の英語「Since my time」はまことに曖昧です。この「私の時以来」とは「私がジークルとつき合い出してから」という意味にも、また「私が生れてから」とい

う意味にもとれます。この曖昧さは、ラニョン博士における問題の主体的側面からして、まことに重要にして且つ必然性を有する曖昧さであると言わなければなりません。実際、この二人のやりとりは、ハイド氏がまだ主体化されていないがゆえに彼ら自身は気付いていませんが、主体的問題として興味深いものがあります。ハイド氏はジーキル博士なくしては勿論成り立ちえないという意味でも、たしかにハイド氏はジーキル博士の被保護者ですが、あの「受動的虚無」の深淵の水鏡に映る死の顔ハイド（その具現がハイド氏である）がジーキル博士の隠れたる素顔（隠れたる、「私は殺す」なる私としての偽善的ジーキル）の映像であるという意味でも、ハイド氏はジーキル博士なくしては成り立たぬジーキル博士の被保護者です。しかし、その事なら、健全なるジーキル博士も隠れたる、「私は殺す」として隠れたる殺人鬼ハイドであるゆえに、隠れたるハイドなくして成り立たぬという意味で、逆にハイドの被保護者なのです。いや、健全なるジーキルは隠れたるハイドとして、或は、隠れる（ハイド）として成り立つゆえに、むしろハイドの絶対的被保護者であるばかりか、絶対的被支配者なのです。

かく主体的問題になると、「そんな男のことは全然聞いたこともない。まだ一度もね」と言うラニョン博士の言葉は、本当でありながら嘘であり、嘘でありながら本当であると言わなければなりません。ラニョンは事実、ジィキルとつき合い出してから、「そんな男のことは全然聞いたことがない」のですが、主体的問題としては、彼はジーキルとつき合い出してから、ハイドのことを「全然聞いたことがない」どころか、彼自身気付かぬながら、ハイドといつも顔つき合わせてきたのです。実際、ラニョンはおのれの絶対的過去性として「私は殺す」なる「私」と生れてこの方ずーとつき合ってきたのですが、「私は殺す」なる私というこの私の隠れた素顔が殺人鬼ハイドに他ならないのですから、ラニョンは生れてこの方「私は殺す」なる私ジィキルとつき合い出してから（尤も隠れているから自分では気付かず、気付かぬから隠れている）ずーと、「受動的虚無」の深淵の水

鏡に映る隠れたるおのれの素顔たる死の顔ハイドを見てきたのです。しかしまた、ラニョンは自己満足の無知としてあり、彼自身であるハイドは隠れたるハイド（隠れるゆえにハイド）としてあるゆえに、彼はジークルとつき合い出してからハイドのことを「全然聞いたことがない」わけです。それはラニョンが「受動的虚無」の深淵の水鏡に映る隠れたるおのれの素顔たる人倫的の顔ハイドを数え切れぬほど見ながら、このハイドとしてラニョンに絶えず呼びかけ呼び返そうとしているあのおおになるハイドを聞く眼をもたぬからであり、かく聞く眼をもたぬゆえに、隠れたる「私は殺す」としての、隠れたる殺人鬼ハイドとしての私ラニョンはハイドのことを「全然聞いたことがない」のです。尤も、後に、ジークル博士とハイド氏の関係についての真実の発見がラニョン博士をやがて死へ導くほどの強烈な衝撃を彼に与えたのであり、この衝撃こそまさしく生死に係わるようなかたちでの退引ならぬハイドとの遭遇に他なりません。尤も、最後まで聞く眼をもたなかったラニョン博士にあって、その遭遇はついに隠れたるハイドとの隠れたる遭遇に終り、つまり、隠れる（ハイド）が隠れたるハイドとしての私ラニョン自身であるゆえに、隠れたるわれハイドに致命的に執われた隠れたるわれハイドとして、無明の死を結果する隠れたる遭遇に終るのです。

さて、ラニョン博士からはそれだけの情報しか得られずにはわが家に帰って来たアタスは、ベッドの上で明け方近くまで輾転反側するのです。「思い悩む彼の心、全くの暗闇の中で様々な疑問に攻囲されて思い悩む彼の心、それは殆ど安息無き一夜」でしたが、その「暗闇」はそのまま外にして内なる「受動的虚無」の深淵の「暗闇」であり、彼を「攻囲」する様々な疑問は、依然隠れてながら、主体化されたハイド氏がその暗い深淵から繰り出す問いかけの矢なのです。教会の鐘が六時を告げても「相変らず彼はその問題に取り組んで」いました（digging at the problem）。アタスが「取り組み」思い悩む「問題」は、かく彼自身には隠れたる外にして内な

るハイドですが、アタスンがこのスフィンクスの謎の「問題」に「取り組んで」dig at the problem 成功する、つまり、掘り出し、発見する、dig out ものがあるとすれば、それは有史以前、時以前、つまり、絶対的過去の隠れたる穴居人ハイド（隠れているから穴居人、隠れる、としてあるから穴居人ハイド）でなければなりません。（あとに出る「いやはや全く、あの男はとても人間には見えない。なにか穴居人みたいなやつ、とても言おうか」と言うアタスンの言葉を参照の事。）それは自己満足的無知のジーキルの「堅い大地」を掘り起すことにより、ついには、ジーキルの「堅い大地」が迷妄であり、実はハイド的「受動的虚無」であったことの発見であり、ジーキルの「堅い大地」の当の住人ジーキルが、実は隠れたる、「受動的虚無」の空洞の住人ハイドであったことの発見です。この穴居人ハイドが「慈悲の内臓無き人間」「a man who was without bowels of mercy」であり、エリオットの言う「うつろなる人びと」「Hollow Men」のひとりなのです。「慈悲の内臓無き」ハイドは内臓無く、うつろゆえに人倫的死のハイドであり、この穴居人ハイドの住む「受動的虚無」の洞穴は、それゆえに、人倫的死の墓場なのです。この隠れたる穴居人ハイド、隠れたる「私は殺す」としての、隠れたる殺人鬼ハイドとしての私ジーキルは、隠れたる私自身である人倫的死の墓場に横たわる隠れたる私自身の人倫的死の姿なのです。偽善の「白く塗りたる墓」が健全なる私ジーキルなのです。なぜなら、「慈悲の内臓無き」隠れたる「私は殺す」なる私ジーキル（殺人鬼ハイド）として立つことにおいて、そのまま私を「私は殺し」て（慈悲の内臓無き男）、みずから掘った死の墓場にみずからを葬り、人倫的死として横たわっているからです。しかし、すでに申したように、かかる私ハイドが私から隠れている（ハイド）ゆえに、逆説的にも、私はかかる私ハイドになっているのであり、もしアタスン氏が「その問題に取り組み」dig at the problem、隠れたる、真実たる人倫的死体ハイドを自己自身において掘り出し、dig out 曝すならば、曝すことが曝されることであり、且つ曝されることがそのま

ま大悲の光に曝されることであり、「慈悲の内臓無き人間」殺人鬼ハイド、つまり、「私は殺す」としての私ジーキルというこの隠れたる真実は、すでに大悲の光に包まれて大悲の真実、非隠蔽性としての真実となっていることを発見し dig out 「慈悲の内臓無き人間」ハイドがそのまま、すでに「大悲の内臓に満てる人間」ハイドになっていることを露わにするでありましょう。「うつろなる人びと」Hollow Men は「慈悲の内臓」bowels of mercy をもたぬゆえに「うつろなる人びと」であり人倫的死であるとすれば、「うつろなる人びと」は「慈悲の内臓」を回復することによって「うつろなる人びと」でなくなる、人倫的生命として立つことになります。実際、人倫的死の穴居人ハイドが住する、彼自身である「受動的虚無」の洞穴（「白く塗りたる墓」、「うつろなる人」のうつろなる洞穴）は慈悲の生命を受胎すべき母胎であり、この受胎は、健全なる私ジーキルが忌避することによって健全なる私ジーキルとして成り立っている当のもの、つまり、人倫的死の「私は殺す」としての、殺人鬼ハイドとしてのおのれの隠れた素顔、を覚知する、受け入れる、ところに成就します。私は「白く塗りたる墓」であり、且つ、人倫的死としてその中に横たわる私であるという覚知は、覚知ゆえに目覚めであり、誕生であって、かく誕生することによって私は、私自身である鬼婆ハイドの死の母胎がすでに隠れたるおおいなるハイドの大悲の母胎としてそのまま人倫的生の母胎となっており、且つ、その中で人倫的死のハイドたる私が人倫的生へと目覚めるべき人倫的死の眠り、胎兒的眠りの中に最初からあったことを知るのであります。実際、もし「慈悲の内臓無き」「うつろなる人」（人倫的死の「私は殺す」としての、殺人鬼ハイドとしての私ジーキル）が「慈悲の内臓」に満たされた人倫的生命として誕生することありとすれば、私はどこまでも「うつろなる人」であるゆえに、それは私の慈悲の内臓ではなく、私「うつろなる人」を「うつろなる人」のままに生かしめるあの大悲の内臓であり、私ハイドはこの大悲の内臓をわが身の内臓として生きる「うつろなる人」ジーキルなのです。つまり、大悲

の中において生かされている、大悲の中において本来的自己を得るのです。そしてその「慈悲の内臓」は信心において形成される他者との関係としての「運命共同」（安田理深師）的感覚というべきものです。

かく見るとき、どうやら隠れたる不毛の岩の鬼婆ハイドはそのまま隠れたる人倫的生の乙女ハイドで、健全なる私ジーキルは結婚恐怖症の独身青年のようです。隠れたる人倫的生の乙女ハイドは健全なる私ジーキル青年に絶えず呼びかけ結婚を求めているのですが、この結婚は、隠れたる人倫的生の乙女ハイド（つまり、隠れたる不毛の岩の鬼婆ハイド）が表に現れないかぎり（というのは、振り向かれないゆえに隠れているのだから）成就しません。別に言えば、健全なる私ジーキル青年は鬼婆ハイド（隠れたる人倫的生の乙女）を忌避する（だから隠れたる鬼婆ハイド、隠れたる人倫的生の乙女ハイド）ことにおいて成り立っている健全なる私ジーキル青年（隠れたる「私は殺す」としての健全なる私ジーキル青年）であり、ジーキル青年が隠れたる「私は殺す」としての私ジーキルであるかぎり（隠れたる「私は殺す」としての私ジーキルは隠れたる殺人鬼ハイド、隠れたる不毛の岩の鬼婆ハイドを意味するゆえに）この鬼婆ハイドとして隠れて表れている人倫的生の乙女ハイドも空しく隠れたままなのです。

この結婚がいやしくも成就するとすれば、それは、健全なる私ジーキル青年が実は隠れたる「私は殺す」としての私ジーキルであったことを覚知し、この覚知せられた「私は殺す」として顕在化し（つまり、人倫的死の殺人鬼ハイドなる私——鬼婆ハイド——を受け入れ、かく受け入れることにおいて、これまでこの不毛の鬼婆ハイドとして隠れていた人倫的生の乙女を受け入れることになる——隠れるとしての健全なる私ジーキルの積極的空無化）、他方、鬼婆ハイドが顕在化することによって、隠れたる鬼婆ハイドとして隠れて表れていた人倫的生の乙女ハイドが顕在化すると同時に成就するのです。顕在化した「私は殺す」としての私ジーキル青年と、顕在化

した殺人鬼ハイド——不毛の岩の鬼婆ハイドとしての人倫的生の乙女ハイド——は、「私は殺す」としての私が殺人鬼ハイドとしての私であり、殺人鬼ハイドとしての私が「私は殺す」としての私ジークルであるゆえに、現れることにおいて（覚知において）出会い、結婚し、一体なのです。この結婚は人倫的死の「私は殺す」としての、人倫的死の殺人鬼ハイドとしての私ジークルの覚知であるゆえに、人倫的死の覚知ですが、その覚知された人倫的死がそのまま人倫的生としての誕生を物語るのです。それはまた、不毛の岩の鬼婆ハイドのその不毛の岩（うつろなる洞穴）が人倫的死の母胎から人倫的生の母胎へ、大悲によって最初からそのまま変容していたことをいまや明らかにするのです。

この「私は殺す」としての私ジークル青年と不毛の鬼婆ハイド（人倫的生の乙女ハイド）との結婚は、「私は殺す」としての私と殺人鬼ハイドとしての私ゆえに、自己同一化に他なりません。実際、それはかかる自己分裂として表れていた隠れたるハイドの、顕在化による自己同一化なのであり、その意味で、この結婚、合一、一体化は両性具有（男女でありながら、男女が死して甦りひとつとなることにおいて男女の性を超えているという意味）のハイドの自己回復を明証するものです。隠れたる穴居人ハイドは両性具有者なのです。しかし、隠れたる「私は殺す」、隠れたる殺人鬼ハイドとしての私ジークル自身はどこまでも、「私は殺す」として立つことにおいて同時に私を「私は殺し」て人倫的死としてある「うつろなる人」であるにすぎず、従って、この隠れたる「うつろなる人」ハイドが隠れたる両性具有者であるとすれば、それはこの隠れたる「うつろなる人」として隠れて表れている大悲のハイドが両性具有者であることにおいて両性具有の本来的自己を得ている、人倫的生を得ているということなのであって、この大悲のハイドなくしては隠れたる私ハイドはただの不毛の両性なのです。実際、隠れたる大悲は自己分裂としての隠れたる虚妄の自我、つまり、健全なる私ジークル（隠れたる「私は殺す」と

しての私ジークル」と隠れたる殺人鬼ハイドとしての私というこの「原罪」のわが身を唯一の在処としてその内に入り、この隠れたる虚妄の自我の自己分裂をみずからの自己分裂としてその自己分裂の内に入り、受苦し、隠れたる「私は殺す」としての私ジークル（健全なる私ジークル）と隠れたる殺人鬼ハイドにそれとして隠れて表れて、本来の自己同一化へ導くべく呼びかけていた、呼び返そうとしていたことが明らかにされるのです。

かように、健全なるジークルが自己隠蔽として成り立つ自己満足的私であるとすれば、この自己隠蔽を破ることに於いて顕現する人倫的生の乙女とは両立しえず、人倫的生の乙女が隠れる（ハイド）ことにおいて成り立っている健全なる私ジークルです。しかしながら、この人倫的生の乙女は隠れたる姿のまま、つまり、健全なる私ジークルの自己矛盾性、自己破壊性として隠れて現れるのです。「堅い大地」の幻想の健全なる私ジークルは必然的に「受動的虚無」の深淵の水鏡に映る、私ジークル自身のこれまで隠れていた死の素顔ハイドが自我自身である「受動的虚無」の深淵に溺死せる人倫的死の私殺人鬼ハイド、つまり、「私は殺す」としての私ジークル自身であったことを自覚し、この人倫的死のハイドを対象化して見る余地無きほど覚知された溺死体の殺人鬼ハイド、覚知された溺死体の「私は殺す」なる私ジークルとして立つならば（というのは、対象化は、かかる自己を対象的に眺める自己が未だ残っていること、健全なる私ジークルがまだ残っていることを物語り、従って、「私は殺す」としての、殺人鬼ハイドとしての私ジークルの素性が依然隠れていることを物語るからですが）、それこそ人倫的生の乙女との出会いに他なりません。しかしながら、健全なる私ジークルは「受動的虚無」の深淵の死の顔ハイドを見たとき、これを「堅い大地」の自分を脅かす「受動的虚無」の深淵の主たる死神ハイドとして对象的に捉え、これから遁れて自己隠蔽、自己忘却を計るのです。この隠れたる死神ハイドが隠れたる人倫的生の乙女だとすれば、健全なる私ジークルは折角愛の手を差しのべる人倫的生の乙女を忌み嫌う結婚恐怖症の

独身青年ということになります。尤も、このジークル青年の眼に映るのは醜悪な鬼婆ハイドとしての隠れたる人倫的生の乙女であり、この鬼婆ハイドの手から逃げようとするのも無理はないようですが、しかし、人倫的生の乙女が鬼婆ハイドとして隠れて、私ジークルの前に表れるのは私ジークルが自己隠蔽として立ち、人倫的生の乙女に背を向けているからです。しかも、私ジークルが对象的に捉えて脅威を感じるこの鬼婆ハイドは对象的ゆえに私ジークルの隠れた(ハイド)投影であり(というのは对象的把握とは対象化ということであり、虚妄分別としての虚妄の自我の意識の対象化作用であるから)、自分が自分の投影に執われている、自分が自分の投影に脅かされているという皮肉な独り相撲を健全なる私ジークルが演じているわけです。

ところで、健全なる私ジークルは受動的虚無の深淵の主たる右のハイドにかく恐れおののき、それから遁れようとする一方で、また、丁度ジークル博士のごとく、醜悪なるものもつ魅力で、对象的に見るこのハイドに心惹かれるということは、健全なるジークルの眼にいまやハイドが醜悪なる鬼婆ハイドではなく、麗しき乙女ハイド(隠れたる鬼婆ハイド)として現れているということであり、健全なるジークル青年はハイドへの変身の試みにおいてこの麗しき乙女ハイドとの結婚を求めているわけです。ところが、健全なる私ジークル青年が对象的に見る麗しき乙女ハイドは对象的ゆえに私ジークルの隠れたる对象的投影であり、従って、自分では無知ながら、麗しき乙女ハイドへの執着は自分の投影への自己執着に他ならず、それとの交接(ハイドへの変身)は自分自身を相手に淫の売り買いをやっていることを意味し、まさしく健全なるジークル青年の自慰行為オナニズムです。ハイドが对象的に捉えられたハイドであるということは、かくハイドを对象的に捉える私ジークルが依然隠れたままの殺人鬼ハイドなる私ジークルであるということであり、従って、ハイドを眼の前に見、ハイドに心惹かれながら、ハイドは私ジークルの眼に隠れているのです。ハイドが隠れているということは人倫的死的殺人鬼ハイドとして隠れ

て表れているあの人倫的生の乙女が空しく隠れたままであり、依然嫌われたままであるということです。しかし嫌いだと嫌いだというかたちで強く心惹かれているということであり、この自己矛盾的自己同一が、自己隠蔽として成り立つ健全なる私ジークルがハイドを嫌いながらハイドへの変身（ハイドとの結婚）を試みるという結果を生むのです。それは、あのH・メルヴィルの『ベニト・セレノ』においてアマサ・デラノを船長とする船の「独身者の歓び」(Bachelor's Delight)という船名の象徴するところと全く同じ意味において、人倫的生の乙女との結婚を恐れる結婚恐怖症の独身青年たる健全なる私ジークルが、結婚恐怖症にも拘らず、或は結婚恐怖症ゆえに、求めるところの人倫的生の乙女の幻との結婚、つまり、「独身者の歓び」たる自慰行為に他なりません。自慰行為は文字通り自らを慰める行為であり、あらゆるかたちをとって表れる所有欲の充足はこの自縛自縛の隠れたる存在の不安の、気晴らし、憂さ晴らしによる、空しい解消の試みなのです。この第二章のはじめに「独身のわが家に帰って来た」アタスン云々という個所がありました。右のごとき意味において、アタスンも、ジークル博士と同じく結婚恐怖症の独身青年なのであり、「独身のわが家」は実際的と同時にまことに象徴的な表現となっているのです。

ところでハイド氏の「問題」がアタスンの「知的側面のみに触れていた」のが、いまや、「彼の想像力もまた魅せられ、とりこにされてしまう」のです。濃い闇の中で輾転反側する彼の脳裏を夢ともうつともつかず、エンフィールドのあの事件の目撃談が「幻灯の絵巻物」となって横切るのでした。「夜の都市の街灯の大野原」the great field of lamps of a nocturnal cityの真只中でいたいけな子供を踏みじり、悲鳴をあげている子供をそのままに去ってゆく悪鬼のようなハイド氏の姿。「夜の都市」とは、ロンドンがあたかも虚栄の都市であり、

実は常闇の都市であるかのごとく、「街灯の大野原」とは、あたかも文明世界を代表するこの文明の都府が精神の大荒地であるかのごとく、深夜の人気無き死のロンドンが雑踏する真昼のロンドンの隠れたる実態であるかのごとく、そして子供を踏みにじる悪鬼のようなハイド氏がその隠れたる主であるかのごとくです。それは人間存在の根源的問題としてひとりひとりの人間において主体的に問われるべき隠れたるハイドが、それを曝すべき自己満足的無知の共通の批判原理の行方不明によって、逆に野放しになり表に跳び出して跳梁する現代の文明世界の精神的状況を象徴しています。しかし、この精神的状況の解決は主体的問いかけを通じて以外にはありません。とうとうとまどろむアタスン氏の眼にはまた別の情景も浮んできます。

或はまた、彼はとある富裕な邸宅の一室を見るのであった。そこには彼の友人が横になって眠っており、夢を見てはその夢に微笑むのであった。それからその室のドアが開けられ、ベッドのカーテンが引き開けられ、眠っている友人が呼び覚まされる、と、見よ、そこに、彼のそばにひとりの人物が立っている。その人物には権力が賦与されていて、その真夜中の時刻でさえも彼は起きてその男の命令に従わなければならないのである。これら二つの相において現れるその人物は終始弁護士を悩ますのであった。そして、何時であれ、彼がとうとうとまどろむと、必らずその人物が眠っている家の中をより一層忍びやかに滑るがごとく通り抜け抜けるのを見、或は街灯の灯る都市の次第に幅広くなる迷路をいよいよ足を速め、ついには見る者に目くるめく思いをさせ、そうして街角毎に子供を踏みつぶし、悲鳴をあげるのもかまわず去ってゆくのをみるのであった。

「彼の友人」とはジークル博士のことですが、ここでもまたハイド氏は、アタスンにとって親友のジークル博士を「強請る」存在なのです。それは、いわば、ひとりの夢魔であり、わが家のベッドの上で楽しい夢に耽っている最中のジークル博士の枕辺に突然現れて、博士を太平の夢から呼び覚まし、忽ち悪夢のごとき現実に博士を

突き落してしまうというわけです。ここで興味深いことは、アタスンの悪夢に登場するジーキル博士と、その悪夢を見ているアタスンとのイメージが奇妙に符合していることです。両者の違いといえば、アタスンの夢の中のジーキル博士が夢魔のごときハイドによって文字通りの太平の夢から悪夢のごとき現実へと呼び覚められたのに対して、アタスンは夢魔のごときハイドによって前日までの太平の現実から、文字通りの悪夢へ突き落されていることです。しかしこの違いはなんら本質的な違いでないのみならず、逆に「現実」^{リアリティ}については本質的示唆を与えるものです。というのは、太平の現実とは、現実の虚妄の自我がなんら脅かされることなく、かかる自己の虚妄性について自己満足的無知の只中にあることを物語り、従って、それは人倫的「实在」^{ソリダリティ}ではなくて、人倫的死的眠りと迷妄の夢以外のなものでもないのであります。つまり、自己満足的無知を意味する太平の現実には自己満足的無知を意味する太平の夢なのです。従って、太平の夢なる太平の現実から虚妄の自我の自己満足的無知を脅かす悪夢へ突き落されるということは悪夢のごとき現実へと呼び覚まされることを意味するわけで、それがいわゆる現実で起ろうと夢で起ろうと、なんの変りもないのです。悪夢のごとき現実であろうと、文字通りの悪夢であろうと、なんの変りもないのです。しかし、この悪夢のごとき自我の現実についての認識はその自己満足的無知が脅かされるというかたちでの、強制された、逃げ腰の認識であるために、太平の夢から悪夢のごとき現実へと呼び覚められたジーキルと、その夢を見ているアタスンとがそうであるごとく、その認識は依然として脅威的悪夢としての認識であり、認識者は人倫的实在の世界にはなく、依然、悪夢の眠りの世界にあるのであって、太平の現実から悪夢に目覚めた認識者は、さらに人倫的实在へと目覚めなければなりません。それは太平の夢（太平の現実）が実は死の眠りの世界における不毛の夢であり隠れたる悪夢であることの自覚、悪夢が人倫的死的夢想者の隠れたる実体であったことの覚知です。それは、ハイド的夢魔を对象的に捉えるのではなく、ハイド的夢魔

が隠れたるハイド的自己自身であることの全面的覚知というかたちで、この覚知されたハイド的夢魔の中に自己が最も充実したかたちで空無化される方向においてのみ可能となる真実の目覚め、真実の知なのです。実際、人倫的実在世界を人倫的非在の世界に変え、みずから自己満足的無知の死の惰眠を貪っている虚妄の自我は、皮肉にも、みずからに悪夢を招く結果になるのです。対象化は虚妄の自我の投影ゆえに、虚妄の自我の投影である対象的夢魔ハイドに虚妄の自我自身が脅迫される、自分が自分に執られるというかたちで自分が追いつめられることになるのですが、それは依然ハイドが隠れていることを意味し（隠れているからハイドは隠れたる虚妄の自我の投影たる脅威の夢魔ハイドとして表れる）、またハイドが隠れていることによって、ハイドとして具現している大悲のハイドが隠れたままでいる、つまり、人倫的生の実存世界への目覚めを空しく呼びかけているのです。

そして、依然としてその人物には顔が無く、そのためアタスはそれが何者か確かめることができなかつた。彼の夢の中でさえも、それには顔が無く、或は、有っても彼の眼には定かでなく、見究めようとすると溶けてしまうのであつた。そのためかえって弁護士の中の心には、本もののハイド氏の顔立ちを見たいという、格別強い、度外れといつてもよいほどの好奇心が芽生え、急速に生長していったのである。もし自分がひと目でも彼をまのあたり見ることができたら、幽霊の正体見たり枯尾花で、その謎の霧は軽くなり、そしておそらく吹き飛ばされてしまふだろう。好き好んでのことなのか、強制されてのことなのか、どっちなのか知らないが、とにかく友人の奇矯とそれから例の遺言状の驚くべき条項の数々すらをも説明する理由が分るかもしれない。それにまた、少くともその顔は一見に価する顔だろう。慈悲心をもたぬ人間の顔、あの鈍感なエンフィールドの心の中に永続的憎悪の霊を呼び起すにはただ現れさえすればよい顔であるゆえに。

こうしてハイド氏はいまやアタスの心に取憑いて離れぬ存在となつてしまい、醜悪なるもののもつ魅力で、この顔無き幻の人物に度外れの好奇心をそそられて、本もののハイド氏の顔をひと目見たいと思うのです。それ

は、主体的には、このハイド氏において表れているアタスン自身の外にして内なるハイドが、顔無き幻として現れて、暗号的ながら、アタスン（「私は殺す」としての隠れたる私）の好奇の眼を強く惹きつけていることを意味します。この顔無き幻が顔無き幻であるのは、アタスンがそれが自分自身の顔であることに未だ気付いていない、自分自身の顔が見えない、自分自身の顔を見る眼が無いからです。自分自身の顔が見えないから、それが顔無き幻としてとどまっているのだとすれば、それが顔のある実在として現れるのは、それが他ならぬ自分自身の顔であることを覚知するときに他なりません。つまり、この覚知が目鼻立ち明らかなるハイドの顔なのです。従って、もしアタスンがハイド氏の顔を單純に對象的に確認することに成功したとすれば、それは主体的に失敗であり、それのみか、その顔無き幻さえも消え去って、アタスは自己満足的無知に帰るのみです。

いずれにせよ、ハイド氏の顔は、アタスンの推察通り、しかしその思惑とは異なる次元で、「一見に価する顔」であり、無邪気な子供を踏みにする「慈悲心をもたぬ人間の顔」です。「慈悲心」をここで表現する英語は *bowels of mercy*（「慈悲の内臓」）ですが、すでに触れたように、「慈悲心無き人間」はまさに「慈悲の内臓無き人間」であり、「慈悲の内臓」無きゆえに、まさしく T・S・エリオットの言う「うつろなる人びと」のひとりです。「慈悲の内臓」無きゆえに、この「うつろなる人」ハイド氏は人倫的死の「受動的虚無」そのものです。生命を踏みにする者は生命を踏みにするにおいて、同時におのれ自身の生命を踏みにじっているのであり、その意味で、殺すことがとりもなおさず殺されることなのです。殺すとは生命への無関心ということであり、生命への無関心がとりもなおさず、すでに生命を殺していることであり、実際の殺人は生命への無関心のひとつの極端な具体的表れなのです。そのようにみると、自己中心的他者否定的虚妄の自我として立つ人間存在ははじめてから「うつろなる人」ハイドです。しかし「うつろなる人」の「うつろなる人」たる所以は、かく「うつろな

る人」としてありながら、「うつろなる人」を他者に帰するのみであり、或は、仮におのれの「うつろさ」を對象的に認めてもその原因、責任を外的条件に帰するのみです。「あの鈍感なエンフィールドの心の中に永続的な憎悪の靈を呼び起すにはただ現れさえすればよい」ハイド氏の顔は、そう言うアタスンにとっても、また、エンフィールドにとっても、他人の顔であって自分の顔ではなく、ハイド氏の顔によって心の中に呼び起された「永続的な憎悪の靈」がこれまで隠れていて今「呼び起された」他ならぬおのれ自身である醜悪なハイド氏の顔であることを知らず、エンフィールドは「一見に価する」その顔を見ようともしなかつたのであり、また、アタスンも「その顔は一見に価する顔だろう」と言いながら、いまのところはまだ、おのれ自身の顔として見ようとしません。

しかしアタスン氏の方はこの悪夢以来、例のハイド氏の家の戸口を昼となく夜となくひまさえあれば出かけて行つて見張るのでした。そして彼は、

「もし奴がどこまでもハイド氏なら、わしはスィーク氏になつてみせる」

と、かたく決意するのでした。説明するまでもなく、ハイド氏 (Mr. Hyde) は「隠れる氏」であり、スィーク氏 (Mr. Seek) は「探す氏」であり、アタスンは隠れてなかなか姿を現そうとしないハイド氏の隠れた正体をきつと突きとめてみせると決意するわけです。彼にとってハイド氏は依然として単純に他人ではありませんが、ここでは彼は無自覚的暗号的ながら、主体的意味あいにおいても、無知の愛知者として立つことを決意したことになります。こうして彼の辛抱強い見張りがついに報いられる日が来ます。或る冷えびえとした静かな夜、いつものように例の戸口の近くで見張っていると、遠くから足音が聞えてきます。それが問題の待ち人の足音だと直観して路次の

入口に身を隠して待ち受けていると、それとも知らずに男は戸口に真直ぐ近付いて行って、まるでわが家に帰って来たみたいに歩きながらポケットから鍵を取り出すのです。アタスン氏が出て行って、男の肩に軽く手を触れて「ハイドさんですね」と声をかけると、ハイド氏はおどろいて思わず後ずさりしますが、直ぐ冷静さを取り戻し、顔をそむけたまま、「それは私の名前だが、何用かね」と尋ねます。「お入りになるところとお見受けしますが、実は、私はジーキル博士の古い友人で、ゴント街に住むアタスンという者ですが、あなたは私の名前をお聞きになったことがおありにちがいない。丁度いいところであなたにお会いしたので、私も中へ入れて下さるだろうと思ったのです。」「入ってみてもジーキル博士は居りませんよ。彼は外出中です」とハイド氏は答えます。アタスンは、ひとつお願いがあるのですが、と言って、「お顔を見せて頂けませんか」と頼むと、ハイド氏は一寸ためらう様子を見せ、それから、突然思い直したように、ふてぶてしい態度で面と向き直ったのです。二人は数秒の間互いにじっと見つめ合っていました。それから、それから、アタスンは「今度またお会いしてもあなただということが分るだろう。それは今後の役に立つかもしれない」と申します。ハイド氏も「会ってよかった」と言い、「ついでながら、私の住所を教えよう」と言って、ソホーの或る通りの番地を教えるのです。「ところで、どうしてあなたは私だということが分ったのですか」という問いに、アタスンは「共通の友だち」のひとりであるジーキルから人相を説明してもらったから、と答えると、ハイド氏は「彼が君なんかには絶対話すものか。あんたが嘘をつくとは思わなかった」と言い捨てて、ドアを開け、家の内へ姿を消してしまいました。取り残されたアタスン弁護士はまるで「不安の化身」みたいでした。ゆっくり歩き出しながら、彼は考え込むのでした。

ハイド氏は顔蒼白く、小人みたいで、どことも言えないけれどもなんとなく畸形の印象をひとに与えるのであった。彼は不快な微笑を浮かべ、小心と大胆とが入り混じった一種兇悪な態度で弁護士に振舞い、囁かれた、囁くような、いくぶん

ぎれがちな声で話した。これらはすべてハイド氏に不利な点ではあったが、これらの点を総合したところで、アタスン氏が彼を見たときのあの、これまで経験したこともないような嫌悪、憎悪、恐怖の情の説明にはならなかった。「つまり他にないかがあるにちがいない」と困惑した紳士はつぶやくのであった。「たしかにもっとなにかがある。それが何であるか口では言えないが、いやはや全く、あの男はとて人間には見えない。なにか穴居人みたいなやつとでも言おうか。それとも昔話に出てくる虫の好かないフェル博士かな、それともそれは単なる汚れた靈魂の輝きで、それが靈魂を容れた土くれの肉体を透過して放射し、その肉体を畸形にしているのだろうか。どうも、これらしい。というのは、おお可哀そうなハリィ・ジークルよ、もし私がひとりの顔の上にサタンの署名を読んだことありとすれば、それは君の新しい友人の顔の上にだからだ。」

ハイド氏が入っていった戸口は、実は表通りに面したジークル博士の邸宅の裏口で、裏通りに面しており、親友のアタスンはそのことをはじめから知っていたのです。ところで、本もののハイド氏の顔を見たら、謎は一挙に解決すると思っていたアタスンでしたが、こうしてハイド氏の顔を記憶にしっかり焼きつくまでまじまじと見つめた後、解決どころか、謎は一層深まるばかりで、あたかも全身をすっぽりハイドの暗い影に包まれてしまったかのごとく、「不安の化身」になってしまふのです。ハイド氏のひとつひとつの不快な特徴をすべて掴みながら、それらを全部併せても彼がハイド氏を見たときのあの「これまで経験したこともないような嫌悪、憎悪、恐怖の情」の説明にはならず、なにかしらもうひとつ、肝心のところで腑に落ちぬものが残るのです。「彼はそのもうひとつのものとして「穴居人的なもの」、「虫の好かない」、「汚れた靈魂の輝き」を挙げ、最後のものをそれだとするのですが、これまた、アタスンの思惑とは違った次元において、これら三つの見方がすべて成立していると言わなければなりません。アタスンが醜悪なるハイド氏に「これまで経験したこともないような嫌悪、憎悪、恐怖の情」を経験したとき、その「嫌悪、憎悪、恐怖」こそアタスン自身が無自覚ながら自己中心的他者否定的

虚妄の自我として立っている事実、つまり、隠れたるハイド（隠れたる「私は殺す」としての私）として立っている事実を曝露するものであり、また、自己中心的他者否定的虚妄の自我として立ちながらかかる自己について無知であり、逆にかかる自己をもって健全にして人間的であるかのごとくいつのまにか振舞っているアタスは、そういう自己満足的無知の自己を脅かす醜悪なるハイド氏において、無自覚ながら、これまで隠れていたおのれ自身の醜悪なる姿ハイドを見、かくして自己満足的無知の自我の実体（隠れたるハイド、隠れたる「私は殺す」としての私ジークル・アタス）の覚知を迫る外にして内なるハイドに「嫌悪、憎悪、恐怖」を覚えるのです。このハイドは人倫的・非在の虚妄の自我をもって自己満足的に人間的としているアタスを脅かすゆえに「人間ではなく」、また、自己満足的無知のたかみにあるアタスの暗き無知の深淵深くその自己破壊性としてひそんでいるゆえに、まさしく「穴居人」であり、人間存在の絶対的過去性として無動機的に立ちはだかるゆえに「虫の好かない存在」であり、「土くれの肉体」がそのまま自己満足的無知のジークルの偽善のたかみになっているとすれば、それを「透過して放射し、その肉体を畸形にしている」「単なる汚れた靈魂の輝き」は、この無知の肉体に必然的に宿り、その肉体を透過して放射し、無知ゆえに健全性を装っている肉体を畸形にすることによってその畸形的実体を明らかにしているハイド的「汚れた靈魂の輝き」であり、その輝きはこの醜悪なるハイドそのものにかく暗号的に表れているあのおおいなる死神ハイドの、真実を曝す輝きなのです。しかしながら、悪魔といい、悪魔に取り憑かれたハイド氏といい、それは悪の対象化に他ならず、その対象化が自己について行われるのであれ他者について行われるのであれ、かく自他を悪として対象化して見る自己自体はあたかも善であるかのように、これこそこの作品で問題にされている善悪「二重人格者」なるいかがわしい観念の基底をなすもの（他なりません。意識（虚妄分別）の自己中心の対象化作用の事実からして、その善悪の判断はいかにしても自己

中心的たるを免れることができず、虚妄の自我の投影たるを免れることができないのであって、信心におけるその自我の虚妄性への反省が、つねにあつてこそ、それは少しは自分に執われない判断としてまともな方向にゆくのですが、しかしそういう反省がないとき、虚妄の自我はいつのまにか絶対化されて独り歩きの道徳的神となり、断罪すべき対象として悪魔を膺り出すのです。

この戯論を草するに当り、安田理深師の御著述に深い御教えを頂いたことを感謝申し上げます。